ガザからの報告 その❶

100の問題を抱えながら、できることを続ける

ハリール・タタリさん（パレスチナ子どものキャンペーンガザ職員）

給水10月13日

子どもたち

停戦継続への不安

停戦になりましたが、昨日は再び45人が殺されました。果たして本当の停戦なのか、とても憂慮しています。そして、これから冬になり雨季になりますが、テントなどもまだ入っていませんし、ブルーシートもなく、本当にたくさんの人が路上で寝ています。この2年間ひたすら私たちは苦しんできました。いまも一人一人が100以上の問題を抱えています。一つを解決しようとしても全てがつながっていて、解決できないのです。パレスチナ子どものキャンペーンでは、毎日中部の12～15のテント村で、給水活動を続けています。ガザ全体では数百のテント村がありますが、到底全部をカバーすることはできません。ガザ市では90%以上が破壊されているため、給水を再開したいのですが、（塩分濃度が高いためガザでは地下水から塩分を取り除く）供給ステーションが稼働できずに給水量が足りず、現在はできません。私は毎日現場に出ているので、雨が降り始める前に何かできないかと思いますが、ビニールシートさえも入手できない状況に焦燥感を覚えます。雨をしのぐビニールや冬の衣類なども緊急で必要です。

100の問題を抱える

個人的にも多くの問題を抱えています。高齢の父親の糖尿病が悪化していて失明の危機にありますが、手術をできる施設がガザにはありません。私自身も家族と一緒に、ガザ市から中部、中部から南部、南部から中部、中部からガザ市、そして中部へと5、6回移動をしました。ガザ市の家は破壊されましたし、同じ地域でも何度か移動を繰り返しました。九死に一生を得る経験も2回あり、重い肝炎にもなりましたが、まだ良い方でしょう。15、6回移動した人はざらにいます。同僚のワリードは10回以上移動していますし、雨露をしのいでいた半壊の自宅から、イスラエル軍の電話一本で追い出され、目の前で爆撃され完全に破壊されました。ただ泣くしかなかったと言っています。私の両親と妻と3人の子どもは無事ですが、妻は親兄弟を失くし、残された2人の姪を引き取りました。ワリードも兄を失くしその遺児たちの面倒を見ていますが、夏には14歳と10歳の甥たちが避難先から自宅に食料を取りに行って攻撃に遭い、一人がなくなり、一人が重傷を負いました。もう一人の同僚は、4人の兄弟を失くし、残された義理の姉妹や甥姪を何人も抱えています。毎日食べ物を探し、薬を探し、安全な場所を探しています。私たちは職があり、収入もあるので、他の多くの人たちよりもきっとマシな状況だと思いますが、それでもとても大変です。

ジャパンと呼ばれて

ガレキを除去するのに5年かかると国連の高官が言っています。ガレキの粉塵が舞っていて、悪臭がし、健康に非常に悪い状況です。がん患者も増えるでしょう。

子どもたちは2年間教育を受けることもできていません。私の末の子どもは2歳4か月です。生まれてから、この戦争しか知らないのです。子どもたちの将来はどうなるのか、とても深刻です。

私も同僚たちも、パレスチナ子どものキャンペーンの職員でよかったと思っています。なぜかというと、大きな団体ではないけれど、現場の私たちのイニシアティブを尊重してくれて、そのために、現場で必要なことを具体的な支援に結び付けられているからです。また良いパートナーに恵まれていると思います。私たちは現場で「ジャパン」と呼ばれていますよ。

全ての人を助けることはできないけれど、一番必要な人を助けることができている、誇らしく思っています。（10月20日）

ガザからの報告 その❷

急性栄養失調は20%以上

ルブナ・サバハさん（パートナー団体母子保健コーディネータ）

私の所属するNECCはガザ市や中部などで3か所の診療所を現在は開いています。最近の「ランセット（英国の医学雑誌）」の報告で、ガザでは急性栄養失調が15～20%の乳幼児に見られるとありますが、現場感覚ではもっと多いです。いまガザ中部には北部からの避難民が殺到しているため、パレスチナ子どものキャンペーンが支援してくれているこのヌ

セイラートの診療所では、母子だけでなく一般の患者さんが毎日250人から350人受診しています。

3月に検問所が閉じられて以降、飢餓が4か月以上続きました。小麦もたんぱく源も入手できず、体重が減少し、倦怠感に苛まれている人が多いです。乳幼児にはマルチビタミンのゼリーや栄養を強化したデーツのビスケットなど、妊婦や授乳している女性には、鉄剤やハイカロリーのサプリを配り、授乳できないほど重症の場合は乳児用ミルクを支給しています。

栄養悪化が起きたのは、封鎖まではUNRWAをはじめWFPやNGO諸団体のネットワークに多くの人が頼っていましたが、それが機能しなくなったからです。特に避難所の外にいる人たちは全く支援を受けられないままになってしまい、残っている乾物、例えばパスタやレンズ豆を砕いてパンを焼いた人も多かったです（パレスチナ子どものキャンペーンでは、乳幼児を抱える脆弱な家庭に食料なども支給しています）。

鎮痛剤がなく苦しむ負傷者

中部では多くの避難民がテントで生活していますが、トイレの問題がとても深刻です。テントのそばに穴を掘ってトイレにしているため、水や食品が汚染して、感染症が広がり、とても多くの人が下痢や肝炎にかかっています。しかし薬剤の不足は深刻です。糖尿病や高血圧などの慢性疾患の薬もありません。そして多くの負傷者、特に四肢を切断した人や重度のやけどなどの人が非常にたくさんいますが、その人たちが必要とする鎮痛剤がありません。診療所にもこうした人たちが消毒や包帯交換にきますが、必要な量の鎮痛剤や抗生物質を渡すことができないのです。

停戦後、検問所が一部開けられて、物資が入りだしていますが、値段が高くてなかなか買えません。トマト1キロが25ドル（約4,000円）以上しますし、肉類はまだ市場には出ていません。銀行は機能を停止し、両替商で現金を入手しようとすると手数料が45～50%取られます（例えば1万円入手するためには手数料が5,000円かかる）。また新しい紙幣が入ってこないのに、ボロボロの紙幣は受け取ってもらえません。

栄養治療食のゼリーを摂取する栄養障がいの子ども

診察を受ける栄養失調の乳児

研修

未来を見通した支援を

最近、パレスチナ子どものキャンペーンと一緒に、プライマリ・ヘルスケア（一次医療）に従事する医療人材の研修を始めました。ガザ内に残っている医師や看護師の多くは、病院での負傷者対応にあたっているため、一般診療の人材が足りません。そこで、看護学校や医学部、栄養学科などを最近卒業した人たちを中心に実地研修をして、人材確保を目指しています。失われたこの2年間を少しでも取り戻すためです。若い女性など30人が熱心に参加しています。緊急支援だけでなく未来を見通した支援には本当に感謝しています。

（10月21日）

ガザからの報告 その❸

私たちは活動を続ける

フィダ・シュラブさん（炊き出しのパートナーでもあるアトファルナろう学校渉外責任者）

残されたのは希望だけ

停戦になって、PTSD（心的外傷後ストレス症）治療が必要な段階になっています。200万人が家を失い、家族を失い、避難生活を強いられ、あらゆる種類の喪失を経験していて、持続的な人道支援が、これまで以上に必要とされています。どうやって普通の生活を取り戻せるのか、とてもチャレンジングです。

子どもたちを学校に戻さなければなりません。テント生活を終わりにし、水汲みではなく遊びができるようにしなければなりません。そして、この戦争で新たに障がい者になった人たちにも対応しなければなりません。トラウマに向き合い、リハビリをし、補助装具を提供する。これ以上の退避命令やテント生活を終わらせ、悪夢を終わらせ、暖かな生活、安全な生活を取り戻さないとなりません。

子ども支援

しかしガザの大半は瓦礫で、水さえもありませんが、私たちは必ず戻ります。「なぜそんなに前向きなの？」と聞かれますが、ガザは私たちの故郷で、土地に基づいた生活と人々の結びつきがあります。私たちはすべてを失ったけれど、残されたのは希望だけなのです。

新たに生まれた多くの障がい者

WHOは、新たに障がい者になった人たちは4万人以上と言っています。身体障がい、失明や失聴など。この人たちは障がいを負ったことを受け入れられず、二重のトラウマに苛まれています。最近もアトファルナの職員の息子が、瓦礫の中にあった不発弾によって、片手を失っています。しかもガザのほとんどのリハビリセンターは破壊されてしまいました。こうした人たちへのセラピー、リハビリ、社会参加、職業訓練や収入創出のトレーニングなどの長期的な計画が必要です。

子どもの支援活動では、テントなどに年齢に応じた少人数のグループの子どもを集めて、遊びやゲームなどのリクリエーションを糸口にして、子どもたちの参加を促し、年齢に応じた学習も提供しています。初めてこうした活動に参加したという子どももいます。状況が安定している時には2,000人位が参加しています(子ども支援の一部もキャンペーンが支援しています)。

私たちは活動を続ける

炊き出し
ガザ市9月29日

炊き出しについては、中部はもちろん、現在もガザ市で実施しています。市場に何もなく、人々が飢餓に苦しんでいた時期も継続しました。やめることなどできませんから。これまでは備蓄していた米やパスタしか提供できませんでしたが、最近は野菜や肉なども提供できるようになっています。ガザの農業は破壊されたので外からの物資です。明日は冷凍の魚を入手できるかもしれないと聞いています（ガザは海に面していますが、攻撃されるので漁には出られません）。

私たちの合言葉は「何があっても私たちは活動を続ける」です。ガザ全体で3,000食くらいを毎日提供していて、その約3分の1はパレスチナ子どものキャンペーンの支援です。

パレスチナ子どものキャンペーンと最近開始した研修事業では、障がい者を含む30名の若者が、コミュニティでの活動のトレーニングを受けています。心理社会的な活動、子どもの保護、性差による暴力、障がいに関する理解、障がいのある人のインクルージョンなどのテーマです。今後は現場で地域住民の人たちへの働きかけをして、コミュニティの再生につなげていきます。また、参加する人たちに手当てを出せるので、若い人たちが収入を得ることができます。ガザの再建のために、若者たちの力をつけることがとても必要なのです。

アトファルナろう学校の開校から30年以上、パレスチナ子どものキャンペーンは私たちのパートナーというよりも、私たちの一部だと思っています。(10月21日)